

日文研究室だより

二〇〇六年度

会長 彦坂佳宣

まず、二〇〇五年度末をもって、近代文学専攻の上田博先生がご退職になったことを記しておきます。石川啄木研究をはじめ近代思想的な分野にもわたる業績を残され、また多くの子弟や研究者を指導されました。「立命館文学」第五九二号の退職記念集には、二九名の関係者の論文、それも近代文学分野ばかりでこの数にのぼるものが掲載されています。

上田先生は、初めはこの種の恒例行事を固辞されておられましたが、後進の仕事を広く紹介する機会として、改めて考えなおされたように付度します。従って、われわれ教員仲間の友情出演の演出はお断わりになりました。その意味でも、将来が期待される、比較的若い方々を中心とする真摯な論集となっていると考えます。学院生なども参加された、間口の広い執筆陣容であることも好ましいところです。ご本人も「和田周三論のために」を執筆されています。

す。
なお、最終講義の際には、退職後も研究に邁進する決意を述べられたと聞いております(すみません、私は欠席しました)。

次に、新年度から、その後任として花崎育代先生が来られました。大岡昇平を主たる研究対象としておられる由です。日文専攻で初めての女性専任教員となりました。

こうした動きで感じるのは、このところ新旧の交代が進んでいることです。専任教員は六〇歳未満の者ばかりとなり、日本文学会の出席者も若年層化が目立ちます。院生が増えたのも一因でしょうし、悪いことではないけれど、強力な指導や手本となるものが少なくなるのは困ったことです。文学・語学の世界では各種の変革が急速に進んでいます。人的・学問的遺産の上に何を盛り、何を変えていくかということを考える、残った者の責任を感じます。

変化といえは、専攻の授業科目も、従来の基幹科目に「日本文化講読」「日本文学と儀礼」「同・音楽」「言語と社会」など多様な内容群が追加され、受講者もかなり定着してきて

います。大学院では、「研究職業養成」「高度教養人」「高度技能展開」の三コース設定が今年度から始まりました。受験者の中にもこのコース制を考えて挑戦した者も当然のことながら居ました。用意された科目も多少の変化があります。このように専攻の教学もかなり変化してきています。

変革の帰趨は予断を許しません。多くの学会関係者が大会・談話会や例会に出席され、機関誌「論究日本文学」にも投稿され、議論の質を高めていくようお願いします。幸いにも談話会には院生はじめ多くの関係者が出席する傾向が現れています。共同研究室もかつてのような賑わいが再び戻るようになれば良いと思います。